

大友宗麟プロモーションに関する報告書

平成25年3月6日

大友宗麟プロモーション検討委員会

～ はじめに ～

地域の魅力やまちの個性を競う都市間競争が激しさを増している中、歴史や文化などの地域特性を活かしたまちづくりが求められています。

そうした中、大分市では、市制施行 100 周年を機に郷土の戦国大名「大友宗麟」を新たなまちづくりの旗印に掲げ、市民の誇りとして広く皆さんとその意義を共有し、全国に情報発信していくこととしています。

そうした中、「大友宗麟プロモーション検討委員会」は、学識経験者をはじめ各種団体や市民の代表から構成され、行政だけでない幅広い視点から、大友宗麟の残した様々な功績や史実をいかに活用し、今後のプロモーションにつなげていくかという視点で向こう 10 年程度の具体的かつ効果的な情報発信の方策について検討を行い、この度その検討結果を「報告書」としてまとめました。

なお、今後の具体的なプロモーションの推進にあたりましては、市民の皆さんとともに、郷土大分が歩んできた誇るべき「宗麟とその時代」の様々な功績や史実に更に磨きをかけ、本市固有の魅力として観光振興や地域活性化に活用していただきたいと切に願います。

最後に、大変お忙しい中、本報告書をまとめるにあたりご尽力を頂きました委員の皆様には感謝申し上げますとともに、関係者の皆様にも検討委員会を代表して厚くお礼申し上げます。

大友宗麟プロモーション検討委員会
委員長 吉津弘一

～ もくじ ～

1.	大友宗麟プロモーションの必要性・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2.	大友宗麟プロモーションの推進にあたっての現状と課題・・・・・・・・	2
3.	大友宗麟とその時代について・・・・・・・・・・・・・・・・	3
	(1) 大友宗麟の人物像	
	(2) 宗麟の築いた国際貿易都市 豊後府内	
	(3) 南蛮文化発祥の地 おおいた ～地下からのメッセージ～	
4.	大友宗麟プロモーションの基本的な考え方・・・・・・・・・・・・	7
	(1) プロモーションの基本理念	
	(2) プロモーションを考える上での3つの視点	
	(3) プロモーションのめざす姿（全体的なキャッチフレーズ）	
5.	大友宗麟プロモーション推進において有効と考えられる方策・・・・	10
	(1) イベント	
	(2) 教育	
	(3) 広報	
	(4) 人材発掘・育成	
	(5) 展示	
	(6) 観光	
	(7) 都市連携	
	(8) ハード整備	
	(9) 行政支援	
6.	終わりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	20
資料編	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
	・ 大友宗麟プロモーション検討委員会設置要綱	
	・ 大友宗麟プロモーション検討委員会名簿	
	・ 大友宗麟プロモーション検討委員会 検討経過	

1. 大友宗麟プロモーションの必要性

本格的な地方分権時代の到来を迎え、一層厳しさを増す都市間競争の中、地方自治体においては、自らの住む地域の歴史や文化を活かした特色あるまちづくりが求められています。

また、まちの魅力の原点は、そこを訪れた人が感じるまちの薫りや、市民が誇りを持って暮らすことにあり、地域住民が脈々と続く郷土の歴史や文化に親しみ、自らのまちの誇りとして共有し、未来に繋いでいくことが、これからのまちづくりにおいて非常に重要です。

大友宗麟の「進取」の精神に基づく大分の南蛮文化の歴史は、我が国においても早すぎた文明開化と呼べるほどの画期的なものであり、当時日本でも有数の国際貿易都市として注目を集めていた様子は、本市の誇るべき歴史的な財産であると言えます。

さらに、現在発掘調査が進む「大友氏遺跡」の現場では、鎌倉時代から戦国時代にかけて大友氏が受け継いできた日本の伝統文化とアジア・ヨーロッパの異文化を融合させた新しい生活様式が、「豊後府内の都市」にしっかりと根付いていたことを裏付ける遺跡等が現在も発見され続けています。

私たちは、そうした様々な史実を改めて検証する中、今から約 450 年前ここ豊後府内に暮らした先人たちの活気に満ちた生活の息吹を、我々の誇りとし、市民共有の財産として、後世にしっかりと伝えていかなければならないと考えています。

そのため、本検討委員会では、「大友宗麟とその時代」が残した様々な功績を大分市民の誇りとして確立するとともに、2030年（平成42年）には生誕500年を迎える「大友宗麟」と「南蛮文化発祥都市おおいた」を本市の「顔」として全国に情報発信していくための方策について検討を行う必要があると考えています。

2. 大友宗麟プロモーション推進にあたっての現状と課題

「大友宗麟」をプロモーションするにあたり、まずその認知度について、現状と課題の把握を行いました。

「大友宗麟」という名前自体の認知度は非常に高いのですが、具体的にどのような功績を残した人物かということまではあまり知られていないという現状に対し、その要因として、「大友宗麟」という人物に対するこれまでの評価や、学校教育の中で特化した授業がなかったこと、大友氏を紹介する中核的な施設がなかったこと、禁教令以降続いた小藩分立時代の影響などが挙げられました。

①認知度の個人差が大きい

「大友宗麟」という名前は知っているが、どのような功績を残した人物なのかを知らない人が多いこと、また、その要因として、宗麟に対する「正の評価」と「負の評価」の乖離が非常に大きいことや、小学校、中学校、高校と「大友宗麟」に特化した授業がなかったことなどが挙げられました。

また、男性に比べ女性の興味、関心が低く、従来とは違った切り口での新たなアプローチが必要と考えられます。

②イベント等の参加者が固定化している

これまでもイベントやフォーラム、講座、体験学習などのプロモーションに取り組んできましたが、参加者が一部の愛好者の方などに固定化しており、告知方法等についても、広く市民に伝わる工夫が必要との指摘がありました。

③大友氏を紹介する中核的な施設がない

市内、県内にも、複数の宗麟の銅像等があるだけで、大友氏が没落して以降、現在に至るまでの数百年間にわたり、宗麟と大友氏について詳しく紹介する中核施設を持たなかったことが、今日の宗麟のイメージが統一されにくいという現状につながってきているとの意見もありました。

④小藩分立の時代が影響している

大友氏没落以降、大分は小藩分立の時代が長く続いたため、現在でも地域の個性や独自性が根強く残っており、大友宗麟の時代の歴史観が共有できていないのではとの意見もありました。

3. 大友宗麟とその時代について

大友宗麟は、今から 483 年前の 1530 年に誕生しました。当時、豊後府内（現大分市）には、上野と顕徳町の二箇所で大友館があり、このいずれかで生まれたものと思われます。幼名を塩法師丸、その後、10 歳の時に元服し、当時の室町幕府第 12 代将軍「足利義晴」の義の字をもらい、義鎮（よししげ）と名乗るようになります。宗麟 20 歳の時、1550 年に、「大友二階崩れの変」と呼ばれる家督相続をめぐる内紛を治め、若くして大友家第 21 代の当主となりました。

翌年 1551 年には、当時、山口で布教をしていたフランシスコ・ザビエルを豊後府内に招き会見をしています。この宗麟とザビエルの歴史的な会見により、キリスト教の布教が許可されます。ザビエルはわずか 2 ヶ月で豊後府内を去ることになりますが、この時、宗麟はポルトガル王へ親書と使者を遣わし、翌年 1552 年から多くのポルトガル人宣教師がこの豊後府内に訪れるようになります。これを契機にいわゆる南蛮貿易が、現在の春日浦から住吉泊地にかけてあったと考えられている「沖の浜」と呼ばれる港を窓口として行われるようになりました。

宗麟が 20 代であったこの 1550 年代は、南蛮船の寄港もさることながら、自ら積極的に中国や東南アジアと交易を行っています。

こうした貿易により蓄積した経済力を背景に、北部九州 6 ヶ国の守護職を任じられるなど大友氏 400 年の歴史の中において最盛期を迎えることとなります。

宗麟はキリスト教の布教を保護しながらも、自らは禅宗に帰依し、剃髪して「宗麟」と名乗るようになります。京都の大徳寺にある宗麟の菩提寺「瑞峯院」に伝わる宗麟唯一の肖像画には、剃髪した宗麟の姿が描かれています。

宗麟は、1578 年 48 歳の時によくキリスト教の洗礼を受け、名実ともにキリスト教徒になります。洗礼名はフランシスコ。フランシスコ・ザビエルにちなんで自ら選んだと言われています。この年に日向に遠征しますが、「日向高城 耳川の合戦」により薩摩の島津氏に敗れ、ここから大友氏の権勢に陰りがみえるようになります。そして、9 年後の 1586 年、宗麟 56 歳の時に、薩摩の島津氏がここ豊後府内に侵攻し、繁栄を極めた国際貿易都市 豊後府内は灰燼に帰してしまいます。

その翌年、1587 年、秀吉の九州平定の後、宗麟はこの年の 5 月に 57 年の人生に幕を下ろします。折しも秀吉によるバテレン追放令が出される直前の出来事でした。



大友宗麟肖像画
(京都大徳寺瑞峯院所蔵)

(1) 大友宗麟の人物像

宗麟の人物像については、1999年に作成した「市報おおいた特集号」において、「進取の人」「開明の人」「英傑の人」というキーワードで結んでいます。

これに加えて、最近では、海外貿易、海外交流史の立場から、当時多くの戦国大名が戦に奔走するなか、宗麟は、日本国内のみでなく、むしろ、広くアジアに目を向け、貿易による莫大な経済力を背景に力を蓄えていった経済大名であるとの評価もあります。



ティセラ日本図(大分市歴史資料館所蔵)

こうした宗麟の姿勢は、アジアのみならず、ヨーロッパにも大きな影響を与えていたようであり、当時ヨーロッパで描かれた日本地図には、九州全体が「BVNGO(豊後)」と記されており、これはヨーロッパ人などの目を通して、豊後、あるいは宗麟の力が大きく認識されていたということを示すものと言われています。

(2) 宗麟の築いた国際貿易都市 豊後府内

宗麟の「進取」の精神により推進された南蛮貿易は、豊後府内の都市に空前絶後の繁栄をもたらします。江戸時代の初め頃に作成された宗麟時代の豊後府内の都市の様子を描いた「府内古図」には、大分川河口の西岸に一辺200m四方にも及ぶ大友館を中心に、南北4本、東西5本の道路によって区画された都市が描かれています。

その中には、「桜町」や「上市町」「唐人町」など、こうした町が40あまり描かれています。また当時の記録では、5,000軒の家が軒を連ねていたとされており、北は現在の長浜町、南は元町の南端の範囲に広がっていました。

この豊後府内の都市は、西の京都と呼ばれる大内氏の守護城下町山口の風情と、大阪の堺や福岡の博多などといった国際貿易都市の性格を合わせ持つ日本でも有数の特徴ある都市でした。

(3) 南蛮文化発祥の地 おおいた ～地下からのメッセージ～

こうした繁栄の原動力となった南蛮貿易ですが、豊後府内では、1551年の南蛮船の入航、宗麟とザビエルの会見からはじまります。

現在、南蛮貿易、南蛮文化というと、長崎というイメージが強いですが、実は長崎の開港は1570年であり、豊後府内は長崎よりも20年近く前からはじめていたこととなります。

平成8年から始まった「大友氏遺跡」の発掘調査では、府内古図をもとに作られた復元想定図のとおり大友館跡や大友氏の菩提寺のひとつである万寿寺跡、当時の道路などが発見されています。



西洋医術発祥記念像
(大分市 遊歩公園)

発掘ではたくさんの品物が出土していますが、南蛮貿易の史実を裏付けるように、ベネチアンガラスなどのヨーロッパ製品が出土する他、中国、朝鮮やタイ、ベトナム、ミャンマーといった東南アジア産の遺物の量が群を抜いています。なかでも中国南部や東南アジアの遺物は、日本の中世都市遺跡の中で有数の出土量を誇っています。

こうした豊後府内の中国や東南アジア産の出土遺物の特徴は、商品としての貿易品ばかりでなく、来住していた外国の人々が日常生活用具として使っていたものが数多く出土する点があげられ、豊後府内に中国や東南アジアの人々が滞在、あるいは居住していたことを具体的に示すものとして大変注目されます。

また、豊後府内はこうしたアジア文化の窓口であったとともに、キリスト教宣教師による西洋文化伝来の地でもあります。日本にキリスト教が伝わり、豊後府内がヨーロッパ文化の受け皿となり、東西文化の出会いにより南蛮文化が花開きました。

1553年に現在の顕徳町1丁目にデウス堂とよばれた府内教会が建てられ、1555年にポルトガルリスボンの商人であり、医師でもあったルイス・デ・アルメイダが、当時貧しさのために子どもを捨てたり、嬰兒を殺したりする人々の惨状に驚き、宗麟の支持を得て子どもを引き取るための育児院を建設しています。数名の乳母が雇われて子どもたちの世話にあたり、牝牛2頭が用意され、幼児には牛乳が与えられました。

アルメイダは1557年、他の神父とともに府内病院の建設を行い、我が国で初めて西洋式外科手術を行ったことでも知られています。記録によると、この病院の運営には「ミゼリコルディア」というボランティア組織があたったとされており、この点で大分は日本におけるボランティア活動発祥の地と言われています。

また、1557年には、日本で初めての日本人による聖歌隊が府内教会において組織され、1561年には日本人少年によるビオラの演奏が行われたという記録から、西洋音楽発祥の地とされています。さらに、1560年にはアダムとイブを題材にした西洋劇などが上演されたことから、西洋演劇発祥の地とも言われます。

少し時代は下がりますが、宗麟が51歳の1581年には、ローマに天正遣欧少年使節を送り出した巡察師バリニャーノとともに、府内にコレジオ（英語でいうところのカレッジ：大学）という高等教育機関を建設します。ここでは語学の他、天文学や哲学、ヨーロッパや日本の古典などの講義が行われました。府内コレジオは薩摩島津軍の府内侵攻により6年間という短命の内に幕を閉じますが、ここで育まれた東西の異文化交流の種は、その後、長崎に引き継がれ実を結びます。こうして府内コレジオで体系的に講義されたヨーロッパの学問や科学思想は後の時代に影響を与えたのかもしれない。



西洋音楽発祥記念碑(大分市 県庁前広場)

このように、安土桃山時代から江戸時代初期、従来からの交易によって間断なくもたらされた東アジア文化と日本古来の伝統文化からなるアジア性に、ポルトガルをはじめとするキリスト教宣教師や貿易商などによって新たに移植された西洋文化が融合し、醸成された文化総体が本市の築いてきた「南蛮文化」であり、海外の文化をいち早く取り入れ、見極め、日本における南蛮文化の「はじまり」を作ってきたのが、他ならぬ宗麟であり、ここ豊後府内だったのです。



大友氏遺跡体験学習館(大分市大字大分〔元町〕)

4. 大友宗麟プロモーションの基本的な考え方

(1) プロモーションの基本理念

「大友宗麟とその時代」の功績を学び、守り、活かし、育てていくことを通じて、ふるさとに対する愛着心や誇りの醸成を図ります。

また、本市の都市の歴史特性や魅力を全国に情報発信することにより、歴史遺産を活かした県都大分市の「顔」づくりを進めます。

**大友宗麟を大分市民の誇りとして確立するとともに、
大分市の「顔」として全国に情報発信する。**

(2) プロモーションを考える上での3つの視点

【視点1】 史実に基づいたプロモーション

これまで文献上の「宗麟」については様々な史実が分かってきましたが、今まさに「大友氏遺跡」を発掘して分かってきた成果、つまり「地下からのメッセージ」を「地上のメッセージ」に切り替えていくことが大事です。

これからのまちづくりを行う上でも、文献や発掘の成果をきちんと踏まえたプロモーションを行う視点が重要であると考えます。

【視点2】 学びながら伝えていくプロモーション

400年の長きにわたり豊後府内の地を治めてきた大友氏とその最盛期を築いた大友宗麟の歴史をひも解くことで、戦国の世に大友宗麟が何を考え、何をやってきたのかを学びながら、改めて郷土の歴史を市民の誇りとして、その浸透と定着を図って行く視点が大事です。

【視点3】 分かりやすく身近に感じるプロモーション

効果的なプロモーションをしていくためには、まず「好奇心」を持ってもらうことが必要です。そのため、人の集まる場所での体験イベントや商品パッケージやゲームなどのキャラクターにするなど、市民に身近なところで「宗麟」が感じられるような仕掛けをしていくことで興味、関心を持つきっかけを作り、市民誰もが分かりやすく身近に感じるプロモーションを行う視点が大切です。

(3) プロモーションのめさず姿（全体的なキャッチフレーズ）

宗麟という人物は、「能」「茶道」などの日本の伝統文化をしっかりと継承しながらも、国外の異文化を積極的に取り入れるという「進取」の精神に富んだ人物であり、その功績は、アジアのみならずヨーロッパにおいても高く評価されています。そのことは、当時の他の戦国大名と大きく違う特徴であり、全国にも誇るべき宗麟の一面です。

また、当時の豊後府内の都市は、国内外の文化が共存する日本でも有数の「国際貿易都市」であり、ここから日本で初めて様々な南蛮文化が発祥したという史実は、『南蛮』をテーマにした他の都市との違いを際立たせる差別化を図る意味でも強くアピールできるポイントでもあります。

～よみがえれ！南蛮文化発祥都市 おおいた～

戦国一の『NANBAN』大名 大友宗麟



プロモーションのめざす姿（全体的なキャッチフレーズ）

～よみがえれ！南蛮文化発祥都市 おおいた～

戦国一の『NANBAN』大名 大友宗麟

プロモーション推進において有効と考えられる方策

プロモーションを考える上での3つの視点

【視点1】
史実に基づいた
プロモーション

【視点2】
学びながら伝えていく
プロモーション

【視点3】
分かりやすく身近に
感じるプロモーション

プロモーションの基本理念

大友宗麟を大分市民の誇りとして確立するとともに、
大分市の「顔」として全国に情報発信する。

5. 大友宗麟プロモーション推進において有効と考えられる方策

検討委員会では、向こう10年程度の期間を想定し、有効と考えられる方策について以下のように集約を行いました。

それぞれの方策については、「イベント」「教育」「広報」「人材発掘・育成」「展示」「観光」「都市連携」「ハード整備」「行政支援」というジャンルに分けました。

また、今後の実施にあたっては、実施時期や事業主体を分類し、計画的に進めることが望まれることから、事業計画の目安として次のように標記しました。

- 事業の立ち上げや実施時期を、「前期」「中期」「後期」に分類しました。
- 市が主体的に行う方策は「市」、民間（市民）が主体的に行う方策は「民」、市と民間が協働で行う方策は「協働」と3つに分類しました。

(1) イベント

イベントについてはプロモーションする上で非常に即効性のあるものですが、今後につながっていくようなクオリティの高い演出や趣向、継続性が重要です。

イベントがきっかけとなって様々な波及効果があることが望ましく、そのためにも、主催する側も参加する側も楽しめる企画やイベント後の検証、事前告知や事後報告などの市民への周知にも配慮することが必要です。

○国際シンポジウム（前期：市）

平成25年8月10日に行う海外から見た大友宗麟の功績をテーマにした「国際シンポジウム」では、関連自治体との連携を図るなどオフィシャルな面を加味しつつ、世界に向けてアピールできるものが望まれます。

○「南蛮バザール」の開催（前期：協働）

JR大分駅から大友氏館跡までの鉄道敷跡を活用して、市民グループや民間による「南蛮大市」の開催が望まれます。

南蛮料理や南蛮菓子その他、銀製品、陶器、ファッションなど、南蛮をコンセプトにした市場に軽トラ市を加えるなど賑わいの創出を図る必要があります。

○宗麟ウォーク&トレッキング（前期：協働）

大友氏館跡から周辺の大友氏ゆかりの地を経て、ゴールの高崎城までのウォーキング&トレッキング大会等を行うのも効果的と思われます。

○「大友氏館跡」及び「大友氏遺跡体験学習館」等の当面の活用（前期：協働）

JR大分駅の高架化に伴い、車両からの「大友氏館跡」の展望も良くなったことから、最終利用計画が決定し、その整備が始まるまでの間、多くの旅行者や県民・市民に対して、ここが「大友氏館跡」であることをアピールするため、下記のような取り組みを市民と協働で行うことが望まれます。

- ① 大友氏館・府内病院・コレジオ・府内の都市^{まち}などのCG等を制作する。
- ② 復元図のイメージや、宗麟をはじめとした武将絵の大型看板を設置する。また点灯したり、動かしたりなど工夫をすることも効果的である。
- ③ 大友氏館の復元図を原寸で「地上絵」としてラインを引いて再現する。
- ④ 宗麟に関する「大型幟」を立てる。

など「大友氏遺跡フェスタ」の一つのイベントとして検討します。

また、実施日の前を「大友ウィーク」又は「大友月間」として、集中的に幟やポスターを掲示するほか、自治会・学校等に案内を出すなどキャンペーンの強化を図る必要もあります。

○「南蛮芸術文化祭」の開催（中期：民）

西洋音楽、西洋演劇の発祥の地である特徴を活かし、発掘の成果から見えてきた華やかな町民の暮らしなどをテーマにした宗麟オペラの創作、上演、さらに市民合唱隊や市民楽団による演奏会などを働き掛けることが望まれます。

○大分七夕まつり（中期：民）

大友宗麟及びそれ以前の時代から行われていた「風流踊り^{ふうりゅう}」や「府内祇園祭」をイメージし、現代の「大分七夕まつり」に結び付けることにより、500年前からある豊後府内を挙げての伝統的なお祭りとしてアピールすることが考えられます。

また、「大友宗麟」をテーマにした「府内戦紙^{ぼっちん}」のほか、大友鉄砲隊や南蛮行列等を加えた「一大南蛮絵巻」の創作などを働き掛けることも望まれます。

○大友氏の秘宝をさがせ ～大友宗麟の残した幻の書状～（後期：協働）

大友氏ゆかりの地を結ぶ「宝の地図（幻の書状）」を参加者に渡し、市内にある歴史観光地等に隠された宝箱を探すイベントは、若者やファミリー層に人気があり、プロモーション効果が大きいと考えます。

(2) 教 育

子どもから大人まで切れ目のないプロモーションを座学や体験学習を交えて計画的かつ継続的に行う必要があります。

また、宗麟の魅力を伝える人材の育成や地区公民館での出張講座など、市民が身近に親しめる学習環境にも配慮をする必要もあります。

○副読本とタイアップした体験学習（前期：協働）

平成25年度から市内の小学校6年生を対象に副読本を使った授業が行われますが、それに合わせ、小中学校の遠足のコースに宗麟ゆかりの地や大友氏遺跡体験学習館を入れるなどのフォローアップを行うことが望まれます。

○紙芝居を作成し保育所等で上演（前期：市）

「そ〜りん紙芝居」等を作成し市内の保育所等で上演することも望まれます。

○大人向けの「ガイドブック」の作成（前期：協働）

副読本や紙芝居に加え、大人向けの「ガイドブック」を作成し大友氏関連の講座など子どもから大人まで切れ目のない歴史教育を行うことが望まれます。

○市民講座「大友宗麟とその時代」の開講（前期：市）

歴史、文化等の専門分野の講師を招き講座を開講することが望まれます。

(3) 広 報

統一感のあるプロモーションをしていくためにも、宗麟キャラクターやロゴを公募し、市民が日常身近に「宗麟」を感じられるようにその活用を図る必要があります。

また、様々な情報伝達ツールがある現在、利用状況に応じた情報提供を行えるよう配慮する必要もあります。

○大友宗麟のキャラクターやロゴの公募とその活用（前期：市・民）

若い宗麟のキャラクターや「SORIN」や「そ〜りん」などのロゴを公募し、商標登録をして身近に触れる「宗麟ブランド」として民間に自由に活用してもらうことも効果的と考えます。

また、上記キャラクターをラッピングした「宗麟タクシー」「宗麟バス」「宗麟トレイン」などを働き掛けることも望まれます。

○「大友宗麟」専用のサイトを立ち上げる（前期：協働）

発掘調査から分かる最新情報のほか、市報の連載記事、副読本、関連の映像など大友宗麟の関連情報を一元管理するサイトを作り、市のホームページに掲載することが望まれます。

また、「宗麟が現代に生きていたら」という設定で、ツイッターやフェイスブックなどのSNSを活用して情報発信を行うことも宗麟を身近に感じるうえで効果的です。

○「大友通信」の発行（前期：協働）

大友氏関連事業に特化したイベント・遺跡の進捗状況、宗麟のエピソードなどを紹介したフリーペーパーの発行を検討する必要があります。

○メディアに取り上げてもらう（前期：協働）

新聞・映画・テレビドラマ・マンガ・本などメディアに取り上げてもらうことで、幅広い層に知ってもらう機会ができ、ゲームやスマートフォンを使った遺跡関連のガイドアプリなどの商品化が期待できます。

また、メジャーなタレントを起用した映画等を制作し、YOUTUBEやUSTREAMなど動画サイトで放映することも効果的であると考えます。

(4) 人材発掘・育成

宗麟の魅力を情報発信する市民サポーターの結成や、宗麟とその関わりのある武将隊などを公募して活用するなど、幅広い年齢層の市民に関心を持ってもらえるよう宗麟をPRできる人材の発掘と育成を行うことが必要です。

○大友宗麟サポーターの結成（中期：協働）

大友宗麟の魅力発信人の募集と登録を行うことが望めます。

サポーターには定期的に最新情報の提供を行い、宗麟関連のイベント等のモニターになってもらうとともに、各人のSNSなどで大友氏関連情報の発信に協力してもらうことも検討する必要があります。

○武将隊の結成（後期：民）

若い宗麟のイメージでの「武将隊」を立ち上げ、イベントやテレビ等に出演し、パフォーマンスやチラシ配布、記念撮影などを行うことが望めます。

また、「立花道雪」「立花宗茂」「高橋紹運」「妙林尼」など大友家臣団とのユニットや、大分の賢人である「福沢諭吉」「滝廉太郎」などとユニットを組んではとの意見もあります。

活動の場は大分だけでなく、都市連携の中で各地のまつりなどと武将隊交流を行うことが望ましいと考えます。

また、「ミセス宗麟（奈多婦人）」「塩法師丸（幼少期の宗麟）」「ミスター宗麟」など公募によるコンテストも幅広い市民の関心を得るのに効果的と思われる。

○大友宗麟「語り部」の育成（前期：協働）

大友宗麟の功績や魅力を語る人材の発掘と育成を行う必要があります。

大友氏遺跡体験学習館での受講生や大友氏遺跡検定の参加者等の中から「語り部」を育成し、市内の小中学生や地域の団体、公民館等での出張講座が望めます。また、DVDの上映やパネルの展示、刀、火縄銃、国崩しのデモ展示をするなど巡回講演のパッケージを作ることも考えられます。

(5) 展 示

歴史上の「本物の遺物」を展示するということは非常にインパクトがあります。そのためにも分かりやすい演出や物語性が必要となってきます。

また、市民が集まるところや寄り付きの良いところ（ホルトホール大分等）での展示にも配慮する必要があります。

○市庁舎などに大友宗麟のコーナーを設置（前期：市）

市庁舎など人の集まる所に宗麟の甲冑や大友氏館の復元予想ジオラマなどを展示することが望まれます。

○図書館内に「大友文庫」を設置（前期：市）

大分市民図書館内に大友宗麟関連の書籍・映像などの関連メディアが貸出できるコーナーを設けることが望まれます。

○大友宗麟の企画展（後期：市）

大分市歴史資料館、大友氏遺跡体験学習館、大分県教育庁埋蔵文化財センター、大分県立先哲史料館、大分県立歴史博物館との連携による企画展を検討する必要があります。

会場については、上記以外に「ホルトホール大分」「アートプラザ」「各都市の巡回展示」など来場者の寄り付きの良さを配慮することが望まれます。

また、大友館の3Dによる復元図などビジュアルに訴えることにより来場者の関心を高めるとともに、そうした素材については、街中のオーロラビジョンでの放映等を行うことも効果的であると考えます。

大友氏館・庭園の縮尺モデルやアルメイダ病院にある西洋式「府内病院」の模型、アルメイダの銅像なども同時展示できないか検討する必要があります。

(6) 観 光

大友氏ゆかりの地を案内するガイドマップの作成・配布や宗麟にちなんだ南蛮料理等の提供等を行うことにより、来訪者をおもてなしする環境整備を官民が協働して取り組むことが必要です。

また、本報告書にある様々な方策を通じて、本市観光のイメージアップにつながるような取り組みを進めていくことも重要です。

○マップの作成（中期：協働）

大友氏ゆかりの地を示したマップを作成し、掲載されている施設（神社仏閣等）において配布することが望めます。

○「食」の歴史を掘り起こして名品化（中期：協働）

「南蛮」「宗麟」にちなんだ新たな物産や創作料理の開発、南蛮菓子・南蛮料理コンテストの開催など、当時の「食」をテーマにPRすることも効果的と考えます。

また、中世大友時代の南蛮食文化の体験や宗麟が好んで食べたという「ほうちょう」など当時の食べ物の専門家を招いて再現することも考えられます。

さらに、そうした「食」を提供していただけるパイロット店舗（武将カフェ・南蛮茶屋等）を一覧できるパンフレットを作成し、紹介することで観光と経済の相乗効果も期待できます。

○全ての方策を観光振興につなげる（前期：協働）

本報告書に掲載する様々な方策を通じて、本市を代表する新たな観光資源として戦略的にPRをし、観光振興と地域活性化につなげていくことが望めます。

(7) 都市連携

大友氏ゆかりの地については、「大友氏関連」「大友家臣団関連」「キリシタン関連」「南蛮貿易関連」と大きく4つのテーマに分類できます。

様々なテーマ毎に関連のある都市と連携を図ることが必要です。

また県内においては、本市が広域観光のハブ的役割を担うことも必要です。

○都市連携による共同プロモーションの促進（長期：市・民）

様々なテーマごとに都市連携による共同PRをすることが望まれます。

大友氏関連

大友氏の出身地となる神奈川県小田原市のほか、宗麟の菩提寺となる京都大徳寺瑞峯院など、歴代の大友氏と関わりのある都市との連携が考えられます。

大友家臣団関連

柳川市の立花宗茂をはじめとする大友家臣団のゆかりの地との連携が考えられます。

キリシタン関連

県内では、国東市・日出町・臼杵市・津久見市・竹田市とのキリシタン・南蛮文化をテーマにした連携が望まれます。

県外では山口市・鹿児島市・堺市などザビエル関連の連携も考えられます。

南蛮貿易関連

南蛮貿易においては、ポルトガル、中国等との連携も考えられます。

(8) ハード整備

大友氏関連の展示物を常時紹介する中核的な場所というのは、今後のプロモーションを展開していく上で重要なことです。

また、大分のまちが南蛮文化発祥の地であるということを感じさせる演出等も今後のハード整備に盛り込んでいく必要があります。

○(仮称)「BUNGO大友資料館」構想と

「大友氏遺跡体験学習館」の拡充(前期:市)

そこに行けば「大友宗麟と大友氏」そして「豊後府内(中世の大分)」について、全てが分かるという場所、そして、いつでも誰でも見て学ぶことができるという場所が必要です。当面は「大友氏遺跡体験学習館」の施設の拡充が求められます。

○JR大分駅の北口駅前広場に

宗麟やザビエルの銅像を配置し南蛮風の演出をする(前期:市)

再開発が進むJR大分駅北口駅前広場において、「大友宗麟公像」の移設と新たに造る「ザビエル像」「南蛮世界地図」等を計画的に配置することで、「宗麟とザビエルの出会い」により、ここ豊後府内から南蛮文化が発祥したことを想起させる演出を行うことが望まれます。

○大友氏遺跡の整備・復元(後期:市)

大友館と庭園の復元だけでなく、府内の地下に眠る長崎や横浜より起源の古い唐人町の町屋の発掘・復元、イエズス会の教会、コレジオ、病院、付属墓地の発掘・発見などに力を注ぎ、他都市にない大友氏特有の特徴をアピールすることも望まれます。

(9) 行政支援

市民団体や民間が行う大友宗麟プロモーションを行政が側面支援していくことも求められています。

○民間活動に対する行政の財政支援（前期：市）

地域おこしに大友色を盛り込んだ「大野川合戦まつり」や、南蛮をテーマにした「おおいた南蛮貿易みなとフェスティバル」「フェスティビタス・ナタリス in BUNGO」「府内南蛮ライティング」など、市民主体の取り組みを今後も継続的なものとしていくため、市が補助金等による側面支援を行うことも検討する必要があります。

6. 終わりに

大友宗麟プロモーションの意義は、郷土の歴史や文化に触れ、大分ならではの「大友宗麟とその時代」を誇りとして、市民への浸透、定着を図ろうとするものです。

今後、大友宗麟プロモーションの推進にあたっては、事業の企画、運営、実施の多岐にわたり、市民をはじめ関係機関と協働しながら、幅広い取り組みを行っていく必要があります。

こうしたことから、市においても関係各課や外部機関との連携が図られるよう、必要に応じて庁内横断的な体制づくりや既存の組織の見直しなどの検討を進めることを望みます。

また、事業を進めるにあたり、市民の理解と協力も不可欠であることから、本報告書に掲げる基本理念の周知を図り、まちづくりの「めざす姿」を多くの市民と共有する中、より効果的なプロモーションの推進に努めていただきたいと思います。

資 料 編

大友宗麟プロモーション検討委員会設置要綱

(設置)

第1条 「大友宗麟」を大分市民の誇り、精神的支柱として確立するとともに、大分市の「顔」として全国に情報発信するための効果的なプロモーションの手法について意見を聴くため、大友宗麟プロモーション検討委員会(以下「検討委員会」という。)を設置する。

(所掌事項)

第2条 検討委員会は、次に掲げる事項について検討を行い、その結果を市長に報告するものとする。

- (1) 「大友宗麟」の効果的なプロモーションに係る具体的な手法に関すること。
- (2) その他「大友宗麟」のプロモーションに関し市長が必要と認める事項

(組織)

第3条 検討委員会の委員は、10人以内とし、次に掲げる者のうちから市長が参画依頼する。

- (1) 学識経験を有する者
- (2) 各種団体の関係者
- (3) 市民の代表者
- (4) 前各号に掲げる者のほか市長が必要と認める者

(参画依頼の期間)

第4条 参画依頼の期間は、第2条の規定による報告の日までとする。

(委員長及び副委員長)

第5条 検討委員会に委員長及び副委員長を置き、委員の互選により選出する。

- 2 委員長は、検討委員会を代表し、会務を総理する。
- 3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

(会議)

第6条 検討委員会の会議は、必要に応じて委員長が招集し、委員長がその議長となる。

- 2 委員長は、必要があると認めるときは、検討委員会の会議に委員以外の者の出席を求め、説明又は意見を聴くことができる。

(報償金等)

第7条 委員に対する報償金等は、予算の範囲内で、市長が決定し、これを支払うことができる。

(庶務)

第8条 検討委員会の庶務は、企画部市長室において処理する。

(その他)

第9条 この要綱に定めるもののほか、検討委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

附 則

(施行期日)

1 この要綱は、平成24年8月9日から施行する。

(この要綱の失効)

2 この要綱は、第2条の規定による報告の日限り、その効力を失う。

大友宗麟プロモーション検討委員会 名簿

委員	所属	備考
吉津 弘一	日本文理大学 経営経済学部教授	委員長
秦 政博	大分市社会福祉協議会 会長	副委員長
鹿毛 敏夫	東京大学史料編纂所 国内研究員	
早瀬 康信	大分市観光協会 専務理事	
佐々木 稔	大分合同新聞社 編集局地域報道部長	
藤澤 卓弘	大分商工会議所青年部 副会長	
牧 達夫	NPO法人大友氏顕彰会 理事長	
田辺 聡一郎	大分未来づくり会議	
竹中 容子	大分県立芸術文化短期大学 学生	

大友宗麟プロモーション検討委員会 検討経過

年 月 日	内 容
第1回検討委員会 平成24年9月3日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大友宗麟とその時代について ・ 市や民間の取組状況について ・ プロモーションの論点について
第2回検討委員会 平成24年10月5日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現状と課題について ・ めざすべき姿について ・ 望ましい方策について ・ 大友宗麟とその時代の認知状況調査の実施について
第3回検討委員会 平成24年11月6日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「大友宗麟とその時代」の認知状況調査結果報告について ・ プロモーションすべきポイントについて ・ めざすべき姿のキャッチフレーズ化について
第4回検討委員会 平成24年11月27日	<ul style="list-style-type: none"> ・ プロモーションすべきポイントについて ・ めざすべき姿のキャッチフレーズの決定 ・ 具体的なプロモーションの方策について
第5回検討委員会 平成24年12月21日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 具体的なプロモーションの方策について
第6回検討委員会 平成25年1月25日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「大友宗麟プロモーション検討委員会報告書」素案について
平成25年3月6日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「大友宗麟プロモーションに関する報告書」を市長へ提出